ウォーカー・ハミルトンの*A Dragon's Life*

―― ドラゴン役者の独白（モノローグ）――

中　尾　真　理*

A Dragon's Life by Walker Hamilton

Mari NAKAO

要　旨

ウォーカー・ハミルトンは1934年に生れ、2冊の短い小説を残して、1969年に若くして亡くなった。本稿は彼の2作目の小説 *A Dragon's Life*（『ドラゴンとともに』）をとりあげ、作家ウォーカー・ハミルトンの紹介としたい。

『ドラゴンとともに』（1970年）は64歳になる売れない役者、サムソン・スワンロードを主人公にした、現代のピカレスク小説である。主人公は化粧品会社の宣伝のドラゴン役に応募するが、痩せ過ぎていると言う理由で、落ちてしまった。ナイロン製のドラゴンに惚れ込んだ彼は、その衣装を盗んで逃走する。ドラゴン姿の主人公は逃走の旅の途中で、人生の裏街道を行くさまざまな人物に出会う。小説はそれらの人々との出会いを通して、自分の人生は失敗であったとの思いから抜けきれないサムソン・スワンロードの内面を探求していく。物語は彼が駐車場の番人になるために、元の町へ戻る決心をつけるところで終わる。主人公が役者であることから、小説は最初と最後の章が戯曲形式で書かれており、さらに2章から10章までは主人公の独白体（モノローグ）で書かれている。青年の繊細さと老人の諦めの入り交じった独白に、お伽話の軽妙さが加わった作品である。

ウォーカー・ハミルトンという作家は1934年、スコットランド南部の、かつてラナークシャーという州であった地方のエアドリー（Airdrie）という町に生れた。父親は鉱夫であったというが、その父親から読書の趣味を受け継ぎ、職業を点々としたあげく、2冊の著書を残して、1969年に亡くなった。まだ三四、五歳の若さである。最初の小説は *All the Little Animals*というもので、1968年に出版された。*A Dragon's Life*は彼の2冊目にして最後の作品である。これは1970年に、遺作としてVictor Gollancz社から出版されたが、1973年にはPenguin Booksからペイパー・バック版が出た。全体でわずか136頁（ペイパー・バック版）という短いものだが、捨てがたい魅力を持った作品である。ハミルトンという作家がこのまま、消え去る運命にあるのか、またはささやかでも後世に残っていくのか、この時点ではなんとも言えないが、おそらく今がその分岐点にあると思われる。本稿では彼の二作目の小説 *A Dragon's Life*を取り上げ、ウォーカー・ハミルトンの紹介と作品の解説を試みたい。

平成15年9月26日受理　*教養部

第一章では *A Dragon's Life* という作品をその構成の点から考え、第二章では登場人物、第三章で社会と時代背景について考えたあと、終章でウォーカー・ハミルトンの今後の展望について取り扱うことにする。

I　作品と構成

(ピカレスク小説)

A Dragon's Life の主人公は64歳になる、売れない役者サムソン・スワンロード（Samson Swanlord）である。彼は役者として有名になることを望んでいたが、夢を果せないまま、今も仕事捜しの毎日である。化粧品会社の宣伝でドラゴン役を募集しているのを知り、オーディションに赴くが、痩せすぎているという理由で、今回も断られる。せりふもない、着ぐるみを着て歩くだけの役だったのだが、他に仕事のあてもない彼は、失望し、ドラゴンの着ぐるみを持ったまま町を逃げ出してしまう。ドラゴンになることに役者として夢を感じていただけに、失望も大きかったのだ。*A Dragon's Life* は売れない老俳優サムソン・スワンロードが現実から逃走しようとする物語とも言えるだろう。

小説は第一章で主人公がドラゴン役のオーディションを受ける場面を見せ、二章からは語り手が主人公に変わって、自ら、その逃走の経緯を物語る。十章で主人公は、足に負傷して、その旅を終えるが、小説は彼が元の町に戻ったその1年後の姿を垣間見る、第十一章で終わっている。つまり、小説のほとんどは主人公の旅道中であり、ストーリーはその途中で彼が出会うさまざまなエピソードから成り立っている。この小説は（1）主人公が悪党（rogue）であるということ、(2) 主人公の旅の冒険物語であること、(3) 各出来事が有機的につながっているわけではなく、旅先で偶発的に起こる出来事の寄せ集めにすぎないことから、一種の古典的なピカレスク小説の形式を踏んでいると言える。

ピカレスク小説と言えば、16世紀から19世紀にかけて、流行した物語形式で、スペインのアルマン・マテオ（Alman Mateo）の『ラサリ―リョ・デ・トルメスの生涯』(1554年)、フランスのアラン・レネ・ルサージュ（Alain-René Lesage）の『ジル・ブラス（Gil Blas)』(1715－35年）などが有名で、イギリスではダニエル・デフォーの『モル・フランダース』、ヘンリー・フィールディングの『トム・ジョンーズ』などがそれにあたる。ピカレスク小説は中世ロマンスへの反動から起こったもので、悪党（picaro）を主人公に、その活動をリアルに描くことを目的としている[1)]。もっとも渡辺一夫・鈴木力衛著『増補フランス文学案内』（岩波文庫）によると、「悪党」と言っても、大した悪事を働くわけではなく、いわば人生の裏道に生きる人々を指す。そして主人公の「悪党」は、人生の裏道を彷徨しながら、社会のさまざまな階層の人物に接触し、いろいろな悲喜劇を演じるが、その間、おのずから、社会全体に対する批判も行なわれる、ということである[2)]。*A Dragon's Life* の主人公も人生の裏道を行く一人で、しかも、そのほとんどを徒歩で、古典的ピカレスク小説そのままに、街道を歩いて道中する。途中、何回か路線バスに乗り、ヒッチハイクもするが、汽車や電車には一度も乗らず、バスに乗るのも夜間だけ、もっぱら人目を忍ぶ旅道中である。

途中、助けてもらったり、逆に人助けもしながら、ヒッチハイクで知り合った男たちや通りすがりに見かけた芸人など庶民の様子が描かれていく。おのずから60年代から70年にかけてのイギリスの社会状況が浮びあがるしかけだが、各エピソードは繋がっておらず、つぎつぎに遭遇する偶然のできごとである。この点でも、*A Dragon's Life*はピカレスク小説の型を踏襲していることは確かである。ただ、この現代のピカレスク物語は十八世紀の古典と異なり、単純、痛快な冒険物語ではない。

(戯曲形式)

*A Dragon's Life*は主人公が役者であることから、全体の構成に一つの工夫がある。それはエピローグとプロローグに当る一章と十一章が「戯曲形式」で書かれ、二章から十章までは主人公の独白体（monologue）で書かれていることだ。

この小説は全部で11章からなっているが、最初と最後の章、つまり一章と十一章だけがスタイルが異なっている。二章から十章までは主人公自身の語りによる１人称小説だが、一章と十一章は３人称で、しかも、動詞が全部現在時制で書かれている。また、一章と十一章は内容的にも形式式的にも非常によく似ている。内容から言えば、主人公の独白が始まる前の導入と、独白が終わった後のその後の物語を示すのだが、語りの形式がこの２章だけ異なるので、作品全体にお伽話かファンタジーの印象を与え、また、繰り返しの効果もあげている。さて、この短い小説の中に、三人称・現在時制の形式と一人称物語形式と、二つの形式が同居している意味は何だろう。主人公が役者であるから、一章と十一章はプロローグとエピローグ、役者が舞台に登場する前の序と退場した後のフィナーレにあたると考えられる。一章と十一章はほとんどせりふだけで進行していくが、それ以外の地の文は、すべての動詞が現在形で書かれている。これは芝居台本でいう「ト書き」形式と考えるのが妥当だろう。通常、「ト書き」は、イタリック体で、動詞の現在時制を使って書かれる。本編の一章と十一章の地の文は、イタリック体でこそ書かれていないが、現在時制を使って書かれており、「ト書き」の慣例に従ったものと考えられる。

さて、一章と十一章は内容的にも、よく似ており、主人公のサムソン・スワンロードがオーディションを受けている場面である。

二つの章の違いはごく仔細なことである。一章では太った男性の上司が、十一章では威厳のある女性の上司になり、一章では金色のドラゴンの着ぐるみが、最終章では銀色の鎧を着た騎士の役に変わっているだけである。また、オーディションを受けている男が背の高い男で、痩せすぎていることを理由に、せっかくの役を逃してしまうところも、まったく同じである。オーディションの選考に立ち会うのは、これもよく似た二人組。最初の章では化粧品会社の宣伝を受け持つ、禿げ頭の男性と眼鏡をかけた男の二人、最終章では新作のミュージカルを計画中の、中年の女性と眼鏡をかけた男性である。どちらの二人も上司と部下の間柄で、二人の間に心理的な葛藤のあることが両者の会話から読み取れるしくみである。二人は着ぐるみの精巧な出来栄えには満足しているが、中に入って演技をする人が痩せ過ぎていることが気にいらない。

'Let's think of a word,' says the bald man. 'Rotund? That's it. It's not *rotund* enough. That's

the word. Am I right?' (p. 5) [3)]

第一章のこの会話がほとんどそっくり十一章でも繰り返される。

'Rotund?' says the woman. 'Odd word to use. I agree with you though. There isn't girth at the chest. *Girth*. Isn't that the word you were looking for?' (p. 135)

結局、オーディションを受けた男性は、「ふっくらしていない (not rotund enough)」ことが原因で、仕事につくことができず、ドラゴンの着ぐるみを持ったまま（騎士は衣装を着たまま)、こっそりその場を逃げ出してしまう。後には太った男（十一章では眼鏡の男）が回転椅子に座って、奇声を発しながら、いつまでも椅子をぐるぐるまわし続けているという、奇妙な場面で終わっている。

さて、この最初の章と、最終章はとてもよく似ているが、よく似た場面であるという印象を与えるのが、作者の意図と思われる。一章で始まった物語は、最終章に至って、また振り出しに戻ってしまうのだ。物語は繰り返す。ぐるぐる回る回転椅子のようなもので、話は一歩も進まない。人生とはそんなもの。そんな教訓を引き出せそうな寓意物語、現代のお伽話としても読めるような全体の構成である。

(役者の登場)

二章から文体は一人称に変わる。語るのはオーディションにもれ、ドラゴン役を断られた背の高い、痩せぎすの俳優サムソン・スワンロードである。ここからいよいよ役者が登場、彼の独白 (monologue) が始まるのだ。彼は64歳だが、年齢をごまかしてオーディションを受けている。売れない俳優、俳優を目指し、うまくいかず、それでもまだ夢を捨てきれない初老の男である。旧約聖書の強力の英雄サムソン (Samson) と、白鳥の王を意味するスワンロード (Swanlord) の名前を持ったこの男は、実は英雄とはほど遠い、非力で繊細な神経の持ち主である。その彼が、英雄的な名前を選んだこと自体、滑稽であるのだが、それは一面、彼の現実離れしたロマンティックな性格を表しているとも言える。そもそも彼がラピス・ラズリのような青い目をした、金色のドラゴンに惚れんでしまうことからして、実際的な人のすることではない。

Chinese dragons. Fire-breathing dragons. Flying dragons. Lucky dragons. Everybody loves a dragon. (p. 10)

というわけなのだ。せりふもない、顔も見えないドラゴン役に彼がこだわった理由は、長い間、役にありつけず、家賃を滞納しているという事情もあるが、ひとつには彼が本気でドラゴンに惚れ込んでしまったこともある。お伽話の世界にしか存在しないドラゴンになるために、手回り品を鞄につめ、あり金をまとめて、ドラゴンの着ぐるみと共に、町を飛び出してしまう。この行動は彼の役者らしい身の軽さを表しているとも言えるし、彼の孤独な身の上が示されているとも言

える。彼を現実に引き止めるものは何もなかったということなのだ。

Ⅱ　登場人物

(裏街道で出会う人々)

主人公は逃走の旅の途中で、さまざまな人物に出会う。彼が出会う人々とのやり取りから、主人公の幾つかの側面が明らかになる。同時に、彼を取り巻く社会の実態も見えてくる。主人公が出会う人物ごとに、幾つかのエピソードをあげてみよう。

まず、最初に出会うのは、バッド（Bud）という名前の男である。彼はねぐらを持たない本物の小悪党である。主人公は町を出ようと決心したあと、まっすぐバス・センターへ行くが、そこで突然、貧血を起こして意識を失ってしまう。そのとき親切に、'You all right?'（p. 15）と聞いてくれたのが、バッドである。彼は親切に介抱してくれるが、実は、主人公の財布を狙う介抱泥棒だった。しかし、親切にしてもらった主人公は、バッドに対して悪い気持ちを持たず、仲良くなる。ねぐらを持たない二人は行動をともにすることにし、一緒にバス・センターを出て寝場所を探す。途中、地下道で酔っ払いにからまれ、臆病な主人公は怯えあがるが、バッドが酔っ払いを殴り倒し、主人公を助け出す。その後、二人は夜の公園のベンチで夜を明かす。逃走の旅の第一日目である。

バッドはほんものの小悪党で、'buffet'を「ブッフェット」としか発音できないように、知性も教養もない単純な男だが、酔っ払いにからまれた時には、狂暴な腕力を発揮して主人公を驚かす。しかし、バッドの単純な性格に、主人公はある種の信頼感を抱くのである。バッドの頑丈な肉体に対して、主人公の肉体的な弱さが強調される。主人公はすぐに貧血を起こすような脆弱な男で、酔っ払いが向こうから歩いてくるのを見ただけで、すくみあがってしまう。しかし、肉体的にはバッドにすがる形の主人公だが、精神的には明らかに、彼が優位に立っている。経験のある年長者としてのゆとり、肉体労働ではなく、俳優という知的な職業についているという自負。バッドが俳優という職業に尊敬の念を抱いているのを知って、主人公のバッドへの信頼感が増してゆく。

> 'What kind of acting do you do?' he said.
> 'There's only one kind.'
> 'Oh. Films?'
> 'Not as yet.'
> 'Telly?'
> 'I'm considering it, but I feel it would limit my style.'
> 'I've never seen a play,' Bud said. 'On the stage, I mean. A real play.'
> 'You don't know what you're missing,' I said. 'There's nothing like it.' I felt more kindly towards him. After all, he may have had an unlucky time, all that kind of thing.（p. 27）

二人の会話から、主人公が舞台俳優であり、映画やテレビにも出たいと考えているが、そのチャンスのなかったことがわかる。バッドと主人公は柵の破れ目から公園に入り、噴水のある池のそばのベンチで夜を明かす。星の明るい晩である。

> We strolled down an avenue of tall trees. I was still limping, but I was so fascinated by the moonlit, starlit park, that I forgot about it. It was a large park, well laid out with flowerbeds and sculpted bushes and plenty of trees. We wandered past ornamental ponds and over wide, lush stretches of grass until we came to a place where, behind a high, box hedge, there was a fishpond with a fountain at its centre. It was a sheltered, private spot, and there were several wooden benches. (p. 28)

ドラゴンを見たいというBudの願いに答えて、主人公はドラゴンの着ぐるみを着て見せる。ドラゴン姿で噴水のある池の周りを一周して、主人公は高揚した気分になる。その時、バッドがドラゴンについて何かせりふを言ってくれと言い出す。

> It was a great moment. I could see how impressed he was, and I was flattered that he wanted me to speak, but I couldn't think of anything. Not a word, not a scrap of poetry about a dragon. (p. 29)

役者は作家でも詩人でもないのだから、ドラゴンのせりふをひと言も思いつかなかったとしても無理はない。それにしても、せっかくの偉大な瞬間に気のきいたせりふの一つも言えなかったのは、凡庸な役者である証拠ではないだろうか。主人公は天才的な役者ではないのだ。バッドが代わりに、ドラゴンのせりふを教え、主人公はそのせりふを言って、ドラゴン姿のまま池の周りをぐるぐる回る。星明りの下、夜の整形式庭園の幻想的な場面が描かれる。

> I looked down into the little fishpool. The fountain at its centre was still and the water was quite clear. Then a movement of the surface caught my eye, and when I peered closely I could see a fish, frolicking white fish about six inches long. It glided among the stems of water plants, a sleek body fringed with delicate, almost transparent fins, trailing like rags of silk.
>
> 'There's a fish here, Bud,' I said.
>
> 'Is it big enough to eat? (p. 30)

ドラゴンという想像上の動物にふさわしい夢幻的な美しさを備えた場面であり、主人公の繊細な感性の示される場面でもある。

眠りこむBudの背中に、主人公は「僕はドラゴンを盗んできた」(p.30) と打ち明ける。やがて主人公も眠りに落ち、夢の中で魚のように眠りの池を泳ぎまわる。

（ドラゴンと森の乙女）

同じように、主人公のロマンティックな性格の示されるのが火事と森の乙女の第五章である。翌朝、バッドにそそのかされ、主人公はドラゴンの着ぐるみを着たまま、町の小さなカフェに入る。バッドは主人公のドラゴン姿で人目を引き付け、その隙に金を盗む計画だったのだ。心ならずも盗みの片棒を担がされた主人公は、ほうほうの態でその場を逃げ出す。途中、着替えを詰めた鞄を失くし、バッドとも離れ離れになり、着ぐるみのドラゴン姿のまま逃走せざるをえなくなる。人目を忍んで道中するうちに、親切な運転手に拾われ、ヒッチハイクの旅となる。途中、油を積んだタンクローリーが炎上する事故に遭遇して、主人公はおもわぬ活躍もした。人が逃げ惑い、炎の燃え上がる事故現場で、主人公はドラゴン姿で、群衆の注意をひきつけ、彼らを安全な場所へ誘導することに成功するのだ。騒然とした火事の現場で、ドラゴンの着ぐるみを着た主人公が、得意のダンスやパントマイムで、人々を先導するさまは、まるでハーメルンの笛吹き男のようである[4]。映画の一場面を思わせるエピソードだ。

活劇の後は、対照的に静かなエピソードが用意されている。騒動がおさまると、主人公は注目を恐れて事故現場を離れた。闇にまぎれて郊外の静かな住宅地を通りかかった時に、彼は犬をつれた女性に声をかけられ、親切にもてなされるうちに、一晩を一緒に過ごす。女性は幼児学校（infants' school）[5]の教師で、経済的にも自立した中年女性、しかも一人暮らしである。ここで主人公は贅沢なお風呂にも入り、ワインを飲み、女性教師とダンスをして楽しむ。

> As I came into the room she said: 'Can you dance?'
> 'If there's one thing I can do, ' I said, 'it's dance.' (p. 55)

ダンス、女性、ワインという気取った組み合わせが、サムソン・スワンロードにとって居心地のいい領域であることが示される。ヴェラ（Vera）という名前のその女性は、なぜ異様なドラゴン姿の主人公を怖がらないのか、その理由を次のように説明する。それは彼女の秘密の森にあった。ヴェラは奥の一部屋に秘密の森を持っている。それは彼女が「盆栽（Bonsai）」を配置して巧みにこしらえた人工の森、温室一杯に拵えられた、一種の箱庭なのだった。

> She took me right to the back of the house, unlocked a door, and we went into a long room. It was a kind of conservatory, the windows curtained on three sides, and I could see why Tarzan [her dog] was barred from the place: there were too many trees. The whole room had been landscaped with sand and earth and a few coloured rocks. There were hills and valleys, and there was a lake.
>
> 'I'll switch on the river,' she said.
>
> She did something with switches inside a box recessed into the wall, and the ordinary light bulb went out for a moment. Then there was a much softer glow from concealed lighting, and I heard water, running water. A river bed, which I hadn't noticed before, began to fill and glitter, and the river ran through the trees and disappeared at the other end of the room, a

continuous flow, tinkling and sparkling. (p. 55)

ヴェラは「私は森に生きているの (I live in the forest.)」と言う。「他の場所にいるときの私は、ただその場をしめているにすぎないのよ (I only occupy the rest of the place.)」(p. 56) というのである。現実離れした世界に生きがいを見出す女性と、お伽話の中国のドラゴン、さらに日本の盆栽を配した人工庭園の不思議な組み合わせ。一方、西洋には、ドラゴンは宝を守っているという言い伝えがあり、英語では若い女性を厳重に監視する怖いおばさんのことをドラゴンと呼ぶ。「森の乙女」ヴェラにとって、ドラゴンは守り役ということになり、従って、主人公のドラゴン姿を怖がらないのである。川が流れ、風がミニチュアの森の梢をそよがせる静かな瞑想の世界。主人公はこの人工の森に惹かれるものを感じ、翌朝、そこを立ち去る前に、もう一度ひとりでこの部屋を訪れる。

ウォーカー・ハミルトンは第一作目の*All the Little Animals*でも、竹の林を描いている。イギリスに自生するはずのない竹林が、コーンウォールの一角に茂っていて、主人公の青年を驚かす[6]。竹林はサマーズ氏 (Mr. Summers) の家を表し、サマーズ氏は青年にとって父親のような存在である。青年はサマーズ氏のもとで心の平安を得、竹に癒されるものを感じる。特に、風にそよぐ竹の葉ずれの音が、青年をひきつける (pp. 23-4)。竹といい、盆栽といい、異国趣味、東洋への憧れと言ってしまえばそれまでだが、60年代末という早い時期に、そうしたものへの憧れが明確に打ち出されていることに注目したい。また、ヴェラの森も、サマーズ氏の竹林も単なる快い「癒し空間」ではなく、二人の孤独な生き方と深く結びついていることにも注意したい。ヴェラは一人暮しの教師であり、サマーズ氏も世捨て人の生活をしている。二人にとって森と竹の瞑想空間は「世間からの隠遁」を意味するものなのだ。

(お金持ちの画家)

六章の、お金持ちの画家とのやりとりは、主人公の俳優としての力量を忍ばせるエピソードである。

主人公が雨の中を歩いていると、またしても親切なトラックが主人公を拾ってくれる。この小説にはヒッチハイクの場面が多い。トラックの荷台にはもうひとり放浪仲間が乗っており、それがお金持ちの画家である。すりきれたツイードの上着を着た放浪者だが、よく見ると目の覚めるような黄色のスェターは新品、上着もズボンも仕立てのよい、上等な身なりという不思議な人物である。画家はぎらぎら光る目をし、威圧的な態度、札束でふくらんだ財布を持っている。彼はパブリック・スクール出身であることのわかるアクセントで、主人公に名前を尋ねる。主人公が「スワンロード、サムソン・スワンロード」と答えると、画家は「きまりが悪くなるほど、長い間私を見つめて」、ひと言、「君を覚えているよ (I remember you.) (p. 62)」と言う。

'Pride myself on my memory,' he said. 'Can't recall the play, or the theatre, but I remember you. Long time ago. You played a young officer. Historical bit of nonsense. Not much of a play, but you were good. Did it run long?'

'No,' I said. 'Not long.' He remembered me. My God. All those years. (p. 62)

主人公が演劇の世界で，過去にどれほどの成功をおさめたものか、この小説には書かれていない。主人公は七章では「(映画では) ・・・いつもせりふのある端役をのぞんだが、一度ももらえなかった」と言っている (p.84)。また、九章では「私は本能的に個性的な脇役を演じてしまう」(p.111) とも言っている。「喜劇は演じたことがない、ドラマの方が好きだった (p.119)」とあるから、軽い調子の喜劇ではなく、もっぱら深刻な内容のdrama専門の俳優であったことがわかる。俳優として成功をおさめるには至らなかったとしても、若い頃にはそれなりの脇役として活躍していたことを、画家の言葉は証明しているわけだろう。画家は主人公のドラゴン姿をキャンバスに描き、主人公は「これで私は永遠のものになった (So I had been immortalized.)」(p.71) と思うが、すぐにそれを打ち消して、「私ではない、ドラゴンだ。(No, not me, the dragon.)」(p. 71) と考え直す。「私なんか何でもないのだ (I was nothing. (p.71))」と。

Ⅲ　社会と時代背景

(庶民の生活と暴力)

旅の途中で、主人公は他にもいろいろな人物と出会う。脂の臭いの充満する十トントラックの運転手——彼は低級獣脂を輸送しているのだ。大道芸人、労働者たち、市場の屋台商人。日曜日の朝、車に拾ってくれた自称「釣り人」——これは週の六日はペンキ屋・装飾工として働き、日曜日は釣りと称して１日パブで仲間と騒ぎ、ストレスを発散している善良な男だ。工事現場の深夜作業員。どれも社会の下積みの人々、激しい肉体労働に励む人々である。この小説が書かれたのは30年も前だが、今この小説を読むと、トランジスターラジオやヒッピーの男女など、60年代のファッションが描かれている。当時、イギリスでは1957年から続いたマクミラン内閣の後、64年にウィルスン労働党政権が発足し、70年にはヒース首相のもとに保守党政権が成立した。インフレ、ポンド危機、経済危機、EC問題と並んで、労働争議が大きな社会問題としてイギリスを悩ませていた頃である。この小説にはヴェラをのぞいて、女性がほとんど登場せず、旅の途中で主人公が出会うのは男性ばかりである。中には兵士の兄弟や、大道芸人に危害を加える若者のように乱暴な者もいるが、多くは異形で放浪中の主人公に親切である。彼らに共通しているのは、浮世のしがらみからはずれて放浪している主人公への羨望である。屋台商人は言う。

'What do you do with yourself?' he said.

'Do with myself?'

'I mean, do you just wander around?'

He was looking at my shoes and my stained coat, and at the white stubble on my face, and for a moment I felt a bite of anger. I was about to draw myself up to my full height and tell him that I was an actor - but I didn't.

'Yes,' I said. 'I just wander around.'

He made a clicking noise with his tongue. 'That's what I'd like. No worries, no income tax. Free and easy. Still, can't have it all ways can we?'

'No,' I said, 'we can't.' (p.103)

屋台商人にただの浮浪者だと見られて、「一瞬、怒りが込み上げ・・・・もう少しで背筋をピンと伸ばし、私は俳優なんだと言ってやろうかと」思う主人公の気持ちも理解できるが、読者としては、放浪の生活に憧れる屋台商人にも共感を抱く場面である。九章の自称「釣り人」も、「そうはいっても」現実に踏みとどまって働かざるを得ない「普通の人々」の好例だろう。一章と十一章の眼鏡の男にも勤め人の悲哀が感じられる。

主人公が出会うのは親切な人たちばかりではない。ヒッチハイクをしながら旅を続ける主人公を脅かすのは、暴力である。暴力はこの作品の最初から最後まで様々な形でつきまとう。バッドが地下道で酔っ払いを殴り倒す時、あたりには血煙が飛び散った。ヒッチハイクで最初に乗せてくれた大型トラックの運転手は、サンドイッチやコーヒーをふるまってくれるやさしい人物だが、追越しをかけようとした女性ドライヴァーに対しては、口汚く罵り、そのあまりの凄まじさに主人公は震え上がる。画家のアトリエを出た後、嵐の中で主人公を拾ってくれた車には二人の兵士が乗っており、ここでも暴力が描かれる。一人は弟で完全に酔っ払っており、もう一人は兄で、冷たい醒めた目をしていて、主人公はその目に憎悪を感じ取っておびえあがるのだ。彼の目の前で、酔った弟が兄に殴られる。

I sat through the punishment in silence, until the young one slumped down in his seat. The driver sat back and lit a cigarette, and as he smoked I watched his eyes in the mirror.

'Get out,' he said. 'Go to hell.'

'Yes,' I said. (p. 73)

後部座席にいた主人公に危害が加えられるわけではないのだが、暴力は常に主人公を脅かす。

(自分自身への問いかけ)

もうひとつ、主人公を悩ませるのが、自分はこれでよかったのかという問いである。ヴェラの家で一晩くつろいだ時、主人公は'Maybe I should have got married, I don't know, that could have been another of my mistakes.' (p.54) と考える。失敗を重ねてきたという意識は、繰り返し繰り返し、主人公の脳裏に沸いてくる。主人公は役者だから、時々気取ったポーズで聴衆に語りかけるように、見得を切ることがある。'What do you think I am? Just because I'm an actor doesn't mean to say that I'm not a gentleman. / Was that melodramatic? Did I ham it up? I'm sorry, I can't help it, it's in my blood by this time. I can't resist a line like that, I never could.' (p.57) といった調子である。これは *A Dragon's Life* に一貫した文体の特徴ともなっている。

しかし、章が進むにつれて威勢のよい気取ったポーズは少なくなり、その代わりに主人公がこれまでの人生を振り返っての自問自答が多くなる。転機となるのは、七章の廃駅の場面である。

鉄道時代華やかな頃の面影を残す、とある廃駅で主人公は一夜を過ごす。レールのはがされた無人のプラットフォームをぶらぶらするうちに、主人公の頭に、プラットフォームは舞台に似ているというとっぴな思いが浮ぶ。誰もいないプラットフォームで、彼は思いつく限りのせりふを朗唱し、想像の観客の前で演技をする。これが作品のちょうど半ばのクライマックスである。主人公が役者としての本領を発揮する場面でもある。ところがその直後、疲れて休息している主人公にうるさくつきまとう男が現れる。それは近所の住人で、主人公を浮浪者と間違え、警察に通報しようとしたのだ。主人公はこの男に、'Old fella like you ー' (p.81) と言われて、ひどくプライドを傷つけられる。「老人」と呼ばれ、昔の「ティック症状」まで現れた。'Old fella'と見られたことは、彼にとってそれほど屈辱的であったのだ。

このあと、主人公の周囲には霧が立ち込め、天候が急激に悪くなる。この小説は季節が早春に設定されており、主人公が旅に出たのも、春の兆しをいち早くつかんだからという季節的な背景があるのだが、ぐずついた天候は後半に向かってますます荒れ模様となる。濃い霧が立ち込め、何も見えない中を主人公は廃線となったレールの上を歩きながら、これまでの俳優人生を考える。

> They would always say I wasn't suitable, too tall for some things, not the right face for others: ears too big or something like that. All in all, I was what you might call ー a failure. (p. 84)

自分は結局、役者として'failure'であったという思いは、彼の名前へのこだわりに集中する。

> I said it aloud: 'Samson Swanlord'.
> Strength and grace and power. I called out: 'I am Samson Swanlord, strong lord of the swans!' (pp. 88-9)

サムソン・スワンロード、強さと優雅さと力、雄雄しき白鳥の王。この名前は滑稽だろうかと、彼は考える。名前が重要であることは、ここに至る前にも示されていた。画家のアトリエを出たあと、主人公は打ち捨てられた古い案山子を見つけてこう語りかけている。案山子は胴体が石鹸箱で出来ていた。

> 'You'll never get anywhere with a name like that,' I said. 'If you want to make a comeback you'll have to change it. Quality Soap, what kind of a name is that? People have done it of course, but not with a name like Quality Soap. Look at all those champion boxers who came back, and came back again. They had the big name, you see? The name's very important.' (p. 60)

自分が'failure'であるのは、サムソン・スワンロードという名前のせいかもしれないと主人公

は考える。煩悶の末、彼はとうとうドラゴンを脱ぎ捨て、霧に閉じ込められたラウンドアバウトで、事故車からレインコートとオーヴァーオールを盗み出した。ドラゴン姿を捨てて平服に戻る決心をしたのは、役者としての自分に自信がもてなくなったからだろう。労務者のような姿になって、主人公は知らない町にたどり着く。英国北部の労働者の町である。新聞紙にくるんだドラゴンを小脇にかかえたまま、主人公は鉄道橋の上から、貨車が下を通過するのを見守った。

> Each wagon was covered with green tarpaulin, and each tarpaulin sagged in the middle and held a pool of clear rainwater which slopped as the train jerked forward. As the wagons passed beneath me, I was able to see myself in these canvas-backed mirrors; the motionless top half of a human figure, bare headed, clutching a parcel wrapped in newspaper.
>
> Samson Swanlord: actor.
>
> I saw ten, twenty, thirty half-men take shape and then vanish again, and as they slipped away under the bridge I felt myself grow lighter: I wanted to go with them, with those other half-men. (pp. 90-1)

目の下を通過する貨車の覆いに溜まった水に自分の姿が映る。その分身に、彼はSamson Swanlord: actor.と名づけるが、分身は貨車が通過するにつれて10, 20, 30と増えつづけ、泡のように彼の視界から消え去って行く。自分自身を客体化し、現実から逃避したいと願っている主人公の印象的な場面である。主人公が自分自身に寄せる関心の深さには、青春小説を読むような味わいがある。

(大道芸人)

旅のクライマックスは大道芸人との出会いである。役者サムソン・スワンロードが、逃げ出した社会との対決を迫られる場面でもある。土曜日の午後、休日を楽しむ労働者でにぎやかな町の市場で、主人公は大道芸人の鎖抜けの芸を見物した。芸人は筋肉質だが、疲れて、追い詰められたような目をしている。「この男には緊張し耐えているというか、忍耐を限度一杯まで引き伸ばしてようやく持ちこたえているといった、一種の霊気（オーラ）が漂っていたので」(p.91)、その芸を見届けることにしたのだ。自身は役者であり、彼の方は「たかが大道芸人」にすぎないが、「彼に共感するものを感じた」(p.91) からであった。

芸人は始めのうちこそ野次馬連中を巧みにあやつって、見物している主人公をわくわくさせる。ところが、芸人の鎖の抜け方があまりに素早く、あまりに巧みだったために、かえって芸が簡単に見えてしまい、見物人からは不満の声が盛りあがる。帽子に投げ入れたコインを取り返しに行く者まで出る始末。芸人は「もう一度挑戦しよう」と言う。見物人はまた人垣を作った。ところが、今度は酒に酔った二人の若者が、腕力に物を言わせ、芸人を鎖できつく縛りあげてしまう。

大道芸人に共感するものを感じていた主人公にとって、芸人に加えられるゆえなき暴力は、彼自身に加えられた暴力も同然である。見物人は大喜びではやしたてるが、歯を食いしばり、顔面を蒼白にしている芸人を見て、さすがにしんと静まり返る。冷たい雨の降る中、いつしか見物人

は散り散りになり、乱暴をした若者もどこかへ姿を消す。誰もいなくなった広場で、鎖で縛られた芸人の孤独な闘いが果てしなく続く。もがき、身をくねらせ、懸命に鎖抜けの芸を演じ、とうとう肉にくい込んだ鎖から抜け出すことに成功する。だが、見物人は一人もおらず、コインも集まらなかったのである。

主人公はこの一部始終を、魅入られたように、見届けた。鋳鉄工業の盛んな英国北部の労働者の町での出来事で、浮き草稼業の主人公は芸人が子供からも馬鹿にされる場面を目のあたりにして、ひどく動揺する。

> I kept thinking of the escape-artist in the market place, and I felt all the pain that he had seemed to be able to control and stifle. Was that sort of thing worthwhile? Certainly not for the money, and yet — (p.104)

土曜日の夜の華やかな雑踏の中を、人目を避けて歩きながら、彼は、大道芸人があれほどの苦痛を忍んで見せたあの芸に、いったいそれだけの値打ちはあったのだろうかと考える。僅かに慰めとなったのは、広場の別の場所で、重量挙げの芸を見せていた老人の姿である。老人は何度も失敗し、しなびた筋肉をぶるぶる震わせてようやくバーベルを持ち上げたのだが、その拙い芸に見物人は喜んでコインを投げていたのだ。

(旅の終わり)

追い詰められた目で難しい鎖抜けの芸に挑戦した大道芸人と、屈託のない笑顔の重量挙げの老人と、二人の対照的な大道芸人の姿は、俳優サムソン・スワンロードの内面への沈潜を一層深めることになった。彼は感銘を受け、混乱し、いっそヨナのように、鯨の胃袋に飲まれ、深い海の底へ潜ってしまいたいと考える。しかし、現実の彼はドラゴンの包みを抱え、みすぼらしい姿で、誰からも顧みられないのである。

さて、多くのピカレスク小説では、旅の終わりで、主人公は改心をする。同時にそれなりの成功と心の平和を手にするわけだが、役者サムソン・スワンロードの場合はどうだろうか。

彼の場合、問題は彼の周囲にあるのではなく、彼自身の中にあった。もといた町に戻るしかないことが彼にもわかり始める。だが、大道芸人の苦痛を見届けた今、町に戻れば、役者を捨て、駐車場の番人になるしか道のないこともわかっている。彼の葛藤は彼が労働者の町を後にし、もと住んでいた町へ戻り始めた後も続き、決意のつかない彼の心中を表すように、旅の終わりは彼にとって試練の連続となる。まず、町に戻ろうと決めた夜、彼は人気のないゴルフ場の小屋で眠るが、押さえ難い思いを発散するかのように、ひとりでダンスに興じる。着ぐるみ着て、再びドラゴン姿になり、月光に照らし出された夜のゴルフ場で、人目に見つからぬよう黙って踊ったのである。ところが、その翌日、これが最後と覚悟を決めドラゴン姿に戻った主人公は、小さな少女に見咎められ、ジプシーに追われてしまう。犬に足を噛まれ、大事なドラゴンは片方の翼を噛み取られてしまった。ほうほうの態で山の小さな洞窟に逃げ込むが、そこでは雨に降り込められ、むなしく１日を過ごす。その間も、自分が駐車場の番人になりきれるかと、問い続ける主人公で

ある。役者としてうまくやれなかったという自責の念は、執拗に彼を悩まし、洞窟の中で、彼は自分の顔をした巨大な指人形の幻に悩まされる。

彼の自分自身との闘いの最後は、夜の工事現場である。黄色い人工照明に照らし出された工事現場を、主人公は強引につっきろうとした。だが、高い土手をよじ登ろうとした時、土砂に足を取られ、脇に抱えたドラゴンの包みを取り落としてしまう。ブルドーザーが走り回り、濡れた大地が波のようにうねる工事現場での、疲れきった主人公の闘いが示される。彼は、滑り落ちたドラゴンを拾い行くが、後ろからはブルドーザーが迫ってくる。ドラゴンは滑り落ちるとき、「両手両足を四方に広げ」、彼の前にその全身を現した。

> I cried out, but the noise of the bulldozer's engine was louder than my voice; then it was too late. The machine moved forward until it had raised the dragon on a high wedge of mud, then it jerked to one side and pushed the earth and the dragon over the edge of the terrace. I saw a golden gleam for an instant, and then the dragon was gone. (p. 129)

次の瞬間、主人公は巨大なブルドーザーの進路にまっ逆さまに落ちて行く。

次に彼が気がつくのは救急車の中である。ブルドーザーに巻き込まれて負傷した主人公が、病院に運ばれるところで、彼の語りによる第十章が終わる。

(物語は続く)

こうして、売れない役者サムソン・スワンロードの旅は、彼が現実を受け入れ、もとの町へ戻り、駐車場の番人として平凡に生きていくところで終焉するかに思われる。しかし、独白はここで終わるが、まだエピローグがついている。十章が主人公を病院へ運ぶ救急車の場面で終わったあと、十一章では再びオーディションの場面が示される。第一章とよく似た場面である。一端終結するかと思われたサムソン・スワンロードの物語は、最後に来て、再び振り出しに戻ってしまう。

実は、主人公の独白の最後(十章)の部分で、病院へ運ばれる救急車の中で名前を尋ねられた彼は、'Oh, that's no good', 'Name's no good at all. Never brought me any luck.' (p.130) と答えている。ところが、その時、彼の目に、'STELMO'S HOSPITAL.'という名前が見える。救急車は'St. Elmo's Hospital'の車だったのだ。これを見て、主人公の頭にひらめくものがあった。彼が傍らの看護婦に名前を聞くと、看護婦は「ローズよ」と教えてくれた。

> I thought about it.
> St Elmo –
> Rose –
> Elmo St Rose. Yes, I liked that. Fire and a flower.
> I tried it: 'Elmo St Rose.'
> The man's voice: 'Is that your name?'

The girl's voice: Let him sleep, it's the injection.'

I savoured the new name. Elmo St Rose. Yes, very distinctive. (p. 130)

かくして、これまでの暗く重い独白は、十一章において一挙にファンタジーの軽い翼で童話の世界へと舞い上がることができた。雄雄しき白鳥の王、サムソン・スワンロードは、薔薇と火を意味する、エルモ・セント・ローズと名前を変えることになったのだ。St. Elmoは船員の守護神であり、「セント・エルモの火（St. Elmo's fire)」は船の檣頭や飛行機の翼に現れる放電現象を指す。「セント・エルモの火」と看護婦の名前「ローズ」を組み合わせて、エルモ・セント・ローズという名前を考えたわけである。エピローグに現れる銀色の鎧の騎士に扮した男は、1年後のサムソン・スワンロードの姿、エルモ・セント・ローズである。背の高い、足をひきずった男。あい変らず端役のオーディションを受け、あい変らず、断られている痩せた男。しかも、今度は怪我をした足を引き摺っているという、新たなハンディが加わっている。オーディションに落ちた騎士は緋色のマントを翻し、銀色の鎧姿のまま逃げ出してしまう。物語はまた最初に戻ったのだ。同じことの繰り返し・・・・

Ⅳ　Walker Hamiltonと今後の展望

最初にも述べたように、作者のWalker Hamiltonは1969年に亡くなっている。作品としてはこの*A Dragon's Life*の他に、処女作 *All the Little Animals*（1968）があるが、たった2作で、彼を小説家として評価することはむずかしい。没後30年もたてば忘れ去られる作家は忘れられ、作品が本として市場に出回ることも少なくなる。*A Dragon's Life*もご多分にもれず、1970年に初版が出、1973年にペイパーバック版が出たあと、品切れ絶版状態で、新しく手に入れることは困難だ。筆者は1973年ごろ大阪の書店で、新刊のPenguin版の*A Dragon's Life*を手に入れたが、その後、この作品について聞いたことはなかった。今回、この原稿を書くにあたって、インターネットで検索したところ、*A Dragon's Life*の重版は出ていないものの、*All the Little Animals*の方は新しくペイパーバック版が出ていることがわかった。Indigo版（1998年）がそれである。それだけでなく、スペイン語版、フランス語版もペイパーバックで出ていたのには驚いた。それらの表紙の写真からウォーカー・ハミルトンの処女作 *All the Little Animals*が映画化され、ジョン・ハート、クリスチャン・ベールが出演していることを知った。おそらく、映画ができたために、急きょIndigo版、スペイン語版が出されたのだろう。映画化されたところを見ると、*All the Little Animals*も短い作品ながら（Indigo版でたった110頁である)、それなりに注目されていたことが想像される。しかし、こちらは*A Dragon's Life*とは全く趣の異なる恐怖小説なので、共通点を見つけることは難しい。

さて、*A Dragon's Life*は古いピカレスク小説の形式に、現代的な心理を盛り込んだ小説と言えるが、主人公の悩みと、彼の遭遇する人々の状況は、不思議なくらい現代の日本のわれわれの状況に似通っている。経済不況、高齢化社会の読者にとって、青年の憧れと老人のあきらめの同居している主人公はとりわけ親しみ深く思われるだろう。作品としては人生の裏街道を描いている

わけだから、決して明るく軽いものではない。むしろ、厳しい中でも現実から逃げ出さず生きている、普通の人々がうまく描かれていることが印象的だ。主人公は「普通の人々」の生活からはやや浮いた役者であるが、彼の周りにあるのが男っぽい力の世界であることが目を引くし、暴力が暗示されていることにも注意を引かれる。

暴力は実は、ウォーカー・ハミルトンの第一作目の小説、*All the Little Animals*の中心テーマでもあったのだ。その主人公は子供のような精神を持った31歳の青年で、一人前の大人ではなく、子供のような'mentality'を持つ、いわゆる'idiot'である。語り手が'idiot'であるところが、小説の技巧となっているが、内容から言えばこれは純然たるホラー、心理的な恐怖小説である。

しかし、二作目の*A Dragon's Life*では、暴力は主人公を脅かしはするけれど、中心ではない。むしろ、'failure'を自認する軟弱な主人公の、美しいものに対する繊細な感性が強調される効果をあげている。軽い、喜劇的な気分も意識的に導入している点は、前作に比べると格段の進歩である。暗い現実からファンタジーへ、諦めから希望へと、物語が無理なく飛翔できているのは、多くの登場人物の中に、ひそかな連帯感のようなものが感じられるからだろう。サンドイッチやコーヒーをご馳走してくれる男たち、屋台の解体作業を手伝わせて煙草や小遣いをくれる人たちの描写には、孤独を好んでも孤立は好まない作者の社会観、人間への温かい眼差しが感じられる。この連帯感がこの作品を後世に残すことになるのではないだろうか。

*A Dragon's Life*は1970年にVictor Gollancz社から初版が出、1973年にペイパーバック版が出たあと、その後の消息がない。果たしてどうなるだろうか。

注

1）Margaret Drabble (ed.), *Oxford Companion to English Literature, Revised Edition* (OUP, 1995) のPicaresqueの項参照。

2）渡辺一夫・鈴木力衛著『増補フランス文学案内』(岩波文庫、1961:1994) より。118-9頁、「ロマン・ピカレスク」の項。

3）テキストからの引用は、Walker Hamilton, *A Dragon's Life* (Penguin Books, 1973) による。

4）四章でBudと入った町の小さなカフェの名前が「ハーメルンの笛吹き男 (The Pied Piper)」であったのは、火事場の場面への伏線であったと考えられる。

5）日本の小学校にあたるprimary schoolは、実際には、infants' school (幼児学校) とjunior school (初等学校) に分かれていることが多い。Infants' schoolは5才から7－8才までを対象にする。

6）Walker Hamilton, *All the Little Animals* (Victor Gollancz, 1968: Indigo, 1998), pp.23-4.

Summary

Walker Hamilton was born in 1934, wrote two impressive novels and died an early death in 1969. This study is to consider his second novel, *A Dragon's Life*, and to introduce Walker Hamilton the novelist.

A Dragon's Life is a monologue of an unsuccessful actor named Samson Swanlord. Because the protagonist is an actor, this short novel is provided with a prologue and an epilogue, Chapter One and

Chapter the Last. In these two chapters, Samson Swanlord's audition scenes are written in dramatic style, that is, all descriptive passages are written in present tense just like stage directions. In Chapter Two, Samson Swanlord begins his monologue and tells how he ran away with the golden nylon dragon costume in which he wanted to act for a cosmetic advertising campaign.

A Dragon's Life is a modern picaresque tale and Samson Swanlord, aged 64, meets a lot of crude, hard-working, lonely people on his journey. He finally accepts the idea that he is 'what you might call' a failure and returns to where he lives to become a car-park attendant. But when his monologue ends, the epilogue shows another audition scene and the story, with the magical swiftness of a fantasy, goes back to where it started.

A Dragon's Life is a fairy tale for those who have a yearning mind, too.